

天理教亜細亜文化研究所の理念とイスラーム

「海外伝道に関する後方の参謀機関」の役割を担うべき存在として、天理教亜細亜文化研究所は創設された。開所にあたって、中山正善2代真柱は、「回教」という語でイスラームに言及しながら、以下のように挨拶を行っている。

具体的に言うと、回教を取上げて研究する場合、回教が異民族伝道に対しては如何なる対策を講じたかを研究することは容易であっても、回教圏に本教が立入る場合には、然らば如何なる対策を講ずべきか、根強い回教の伝道対策なり、信仰なりに圧倒されることなく、そこには如何なるウィーク・ポイントがあるか、そのウィーク・ポイントを衝くには如何にすべきかと云ふところまで掘り下げることが大切である⁽¹⁾。

明治時代に入るまで、イスラームはほとんどすべての日本人にとって全く馴染みのない宗教であった。明治維新以後、外国人居留区を中心に居住しはじめた外国人のなかに、ムスリム（イスラーム教徒）たちも含まれていた。イスラームもまた、「回教」という名称が中国経由でもたらされ、人口に膾炙するようになった。日本に最初に建設されたモスクをめぐる諸説があるが、一般的には1935年に建てられた神戸モスクであると言われている。言い換えれば、それ以前の日本でモスクを目にする機会がなかったと言える。しかしながら、2代真柱はイスラームの影響力を十分に認識していた。その背景には、中国への巡教における2代真柱とイスラームとの出会いがあった。

旅と2代真柱

2代真柱の海外巡教に際しては、巡教のたびに視察した各地についての記録が出版されている。初めての巡教記録である『鮮満支素見』（1927年）をはじめとした詳細な記録は、日本における中国研究や、日本イスラーム史の観点からも一級品の史料である。それは、当地の宗教情勢について、人名をはじめとした詳細な記録だからである。

2代真柱による旅として、『六十年の道草』の序文における中山善衛3代真柱の回顧に言及しておきたい。

一般に、憩いを求めて本を読み、旅し、人と交わるといいうが、父は自分だけの楽しみに本を集めたとも、身体を休めるために旅をしたとも、私には思えない。

布教に役立てるために本を読み、集める。教祖の教えを伝え、苦悩から救われる道があることを教えるのに、人の考え方の発想が理解できなければ、それぞれの人に満足して貰える話し方が出来ないというもので、父は人に喜んで貰いたいために、本を集めたことと思う。

また、巡教の地に赴くために動くことを、人は旅という。父の旅とは、親神様がお出張りくださっている土地へ足を運ぶことであり、その道中で見聞することで道の広め方を頭に書き、土地土地で起るかも知れない問題点を早くから想定して、道を誤る人がないように心を働かせていたのだらう⁽²⁾。

布教を想定しながら本を読み、天理教の海外伝道を念頭に置きながら、「旅」した2代真柱が、イスラームと実際に出会ったのは中国だった。また、少なくともモスクなどのイスラーム建築を初めて目にしたのは、中国におけるモスクだった。

中国大陸と朝鮮半島へ渡った天理教徒たちの巡視のため、2代真柱は、昭和元（1926）年以降、頻繁に巡教を行った。巡教記録は『天理時報』に掲載され、さらに刊行物としても出版されることで、現地に赴いていない天理教信者たちの目にも、当地の様子が伝えられた。昭和5年、2代真柱は3月2日から4月15日まで中国巡教し、その後には当地で収集した中国の風俗を展示した支那風俗展覧会が開催されている。これが契機となって海外事情参考品室が設立され、現在の天理参考館の創設へとつながっている。

山澤為次の「日記帳」より

『上海から北平へ』（1934年）は、昭和5年の海外巡教の記録であるが、宗教情勢についての記録書でもあった。そこには、当時の中国で活動していたキリスト教団体などの記録とともに、「清真寺」と題された項目がある。この清真寺とは、イスラームのモスクを指す中国語である。『上海から北平へ』には、2代真柱一行が1930年4月6日の午後1時に、当時、中国で活動していた川村狂堂の案内でモスクを訪問したことが記されている。ただし、2代真柱に随行した山澤為次の「日記帳より」によると、2代真柱一行はそれ以前にもモスクを訪れていたようである。以下は、天津で書かれた記録であると推測される。

三月三十一日 月曜 晴天

午前中、支那人街の清真寺（回教）を御視察されることになった。付近一帯は回教徒街をなし、寺では寺子屋式の経漢けいかん小学校が設けられていて、其処ではアラビア文字を子供達に教えていた。管長様は殿堂及び斎戒沐浴場等を一々活動のレンズに取められた⁽³⁾。

その後、一行は天主堂などを見学し、天津伝道庁にも立ち寄った。そして、北平へ移動した一行は、4月6日に再び清真寺を訪れることになる。

四月六日 日曜 快晴

午前八時旅館を出発、佐藤布教所、東条藤井川崎布教所に御参拝になる。四君は共に天理外語の卒業生だが、純支那人となって北平支那街で布教に専念している。（中略）

一旦旅館に帰って昼食の後、午後一時より北平城外の清真寺（回教）の見学に赴かる。丁度昨日東方文化事業研究所にて御面接の河村氏は回教信徒であり且つ同教研究の大家で、同氏が一々詳しく案内説明の労を取って下された⁽⁴⁾。

海外布教を志して渡航した人々や、天理外国語学校の卒業生たちも、イスラームに触れる機会があったと推測される。しかしながら、後世に記録が残されるかたちでイスラームと出会った最初の人物は2代真柱であった。この2代真柱とイスラームとの出会いは、少なからず天理教亜細亜文化研究所への創設につながったと考えられる。

[註]

- (1) 「亜細亜文化研究所第一回所員会議に於ける訓話」『管長様御訓話集（第3巻）』天理教教義及史料集成部、1944年、78頁。
- (2) 中山善衛「序文」、中山正善『六十年の道草』、天理教道友社、1965年、3頁。
- (3) 山澤為次「日記帳より」、『みちのとも』（昭和5年5月5日号）、34頁。
- (4) 同上、35～36頁。